

## 退屈

千本田 明華

残暑の残る秋、有本拓也は平凡と感じる自らの人生を変えるような商売を考えていた。有本は物心ついた時から何事もうまくこなし周りからの信用もある要領の良い男だった。しかし、周りから見たら順風満帆な彼だが病的に退屈しやすく刺激を求める傾向がある。それは彼の趣味を聞けばわかる。たとえば、見ず知らずの人に電話をかけその人の知り合いのふりをして会話する。あるときは、自身の小柄な体格を生かし、学生や女性といった姿に変装し、都会を徘徊することもあった。このように周りにはない奇妙な趣味があった。そんな趣味を持つ彼だがこの趣味を誰にも気づかれたことない。ましてや、今のご時世何かあったらインターネットにすぐに広まるというのに。有本はその事を他人にはない自分の個性ととらえ考えるようにした。そしてある商売を思いつく。有本は早速その商売に取り掛かるため、会社の辞表を書いた。

三か月後、「暇だなー」と昼間から能天気につぶやく有本がいた。有本はあれから横浜駅近くの雑居ビルの3階を借り、探偵事務所を開いた。有本の商売は結果としてうまくいった。しかし、その結果、有本は退屈しつつあった。そんな、有本のもとに仕事の依頼者が来た。その依頼者は秋も終わりだというのに、季節外れのつばの長い白い帽子に白いワンピースを着た若い女性だ。有本は「忙しいから依頼は受け付けてないよ」と言った。女性は「いえ、交番の場所を聞きたくて…」と答えた。さて、読者の皆様、少し不思議と思ったのではないだろうか、何故、暇だとつぶやいた有本が忙しいと答えたのか。女性が昼間の横浜駅の近くでわざわざ雑居ビルの3階にある探偵事務所に来て道を聞くのはおかしいことではないか。その理由はこれからの展開でわかる。有本は「わかりました。こちらへどうぞ」というと女性を事務所の中に通した。有本は続けて「私に任せてください。なぜなら私は変装が仕事ですから。」そう、有本の仕事は探偵ではなく変装することだ。

例えば、「彼女に風邪と嘘を言ってデートを断った。俺ふりして家にいてくれないか。」と依頼されたとする。それに対して有本は依頼者の家に行き。依頼者がいつも家で過ごしているような行動をする。もし、依頼者の彼女から連絡が来たときは、趣味で培ったことを生かし、その場をやり過ごした。また、高校生から「僕のかわりに補修を受けてほしい」と依頼があった際は、変装をして学校に潜入したこともある。最初は知り合いに宣伝して始めた商売だったが、有本の仕事のできが良いのか、いつのまにか広がり、今では、こっそり隠している金庫に三百万もあるほどだ。

さて、本題に戻そう。女性は有本に「私はストーカーに悩まされています。今も追われているのです。なので、私のふりをして元町通りを歩いてくれませんか。」と話した。犯罪に巻き込まれるような依頼だったが有本はいつものように「わかりました。では、あなたがいつも身に着けているものを貸してくれませんか。後、所要時間について一緒に相談させてください」と、女性は自分の身に着けているものを渡し、所要時間を話した。身に着けているものは事務所の変装用クローゼットにもある女性に人気のブランドだ。所要時間は彼女が帰宅するまでの一時間となった。そして、有本は女性の姿に変装した。女性はあまりの出来に唾然としていた。有本はそんな反応も気にせず、服の返却や送金方法をひとしきり説明した。そして有本は、「最後に、何かご不明な点などはありますか。」と尋ねた。すると女性は「どうして、この仕事をしているのですか」と、有本は初めて仕事について聞いてくれたことに素直に内心喜びながら平然を装い質問に答えた「なあに、平凡で退屈だったからです。もっとも、金庫に大金が貯まって、この仕事にも慣れ、退屈しそうですが」と、女性はふっと笑いながら「そうですか、退屈しないといいですね。」と答えた。そうして、有本は女性から借りた。白い帽子をかぶり事務所を出た。

有本は、元町通りを歩いた。周りの人々は有本が男だということに気付いていないかのように自分たちの世界にいる。それほど出来の良い変装なのだ。こうして、三十分ほど歩いたころ、ふと、有本は依頼について思い出した。それは、ストーカーについてだ。今回の依頼は、依頼者の代りにストーカーに追われるという内容なので、気になって後ろを向いた。しかし、誰も後ろに誰もいない。また、周りの人も有本に目を向いている様子もない。誰も見てないことに不思議と思ったが、依頼を受けた以上、一時間、元町通りを歩くことにした。その後、残りの三十分、時々、後ろを確認しながら歩いたが誰もいなかった。有本は今回、依頼が失敗したのではないかと不安に思いながら事務所に戻った。

しかし、有本の予想は多く外れた。なんと、事務所が荒らされ、金庫がなくなっていたのだ。金庫のことは、先ほどの依頼者にしか話していないため、警察に通報しようとした。しかし、今までの依頼がばれ、有本自身が警察に捕まる可能性がある。有本は犯人の正体がわかっているにも関わらず、捕まえることにできないことにやるせない気持ちが湧いた。しかし、同時にこのようなことがあるのかと思い、有本の中で退屈が解消された感覚が広がり笑みがこぼれた。